

『枕草子』と『源氏物語』における『白氏文集』

——感傷詩を中心に——

張 培 華

要 旨

『枕草子』と『源氏物語』における『白氏文集』の影響についての研究には、引用の視点一つをとっても多種多様な考察がある。しかし、『枕草子』と『源氏物語』の両作品全体と『白氏文集』との関係や、その受容の温度差にまでふれたものについては、管見の限り見えない。そこで具体的な引用の箇所を網羅するだけでなく、その分析に取り組むことが、本稿の目的である。結論的なことから言えば、清少納言と紫式部の両作品における『白氏文集』への好尚は歴然と分れていると言える。白居易は自らの作品を諷諭、閑適、感傷、雑律詩に四分類したが、その部類の観点で『枕草子』と『源氏物語』の両作品を分析すると、『枕草子』の方が感傷詩の引用数が多いことがわかる。また感傷詩に分類される「長恨歌」は、『枕草子』に一箇所引かれるのに対し、『源氏物語』では十二箇所の引用が指摘され、圧倒的に多い。さらに清少納言は『枕草子』の中で、意識的に感傷詩の表現を借りて、父藤原道隆を失った定子の悲況を表し、定子自身も自ら感傷詩を念頭に置く詠歌を行っていた。その結果、感傷詩が多くなったといえよう。このように、清少納言と紫式部の感傷詩の引用の差異に着目して、両作品の性格の本質を考察することを試みる次第である。

『枕草子』と『源氏物語』における『白氏文集』（張）

清少納言と紫式部は、『白氏文集』をそれぞれ次のように記した。まず、清少納言は『枕草子』「文は」の章段で、「文は、文集。文選。新賦。史記、五帝本紀。願文。表。博士の申文。」と、「文集」、すなわち『白氏文集』を挙例の冒頭に採り上げた。対して、紫式部は『源氏物語』「須磨」で、「またさるべき書ども、文集など入りたる箱、さては琴一つぞ持たせたまふ。」と、須磨への旅に携行する書物に『白氏文集』を加えている。当時の『白氏文集』の流行がよく分かる一文である。

ところで、清少納言と紫式部は『白氏文集』のどの部分を好んで引いたのだろうか。白居易は自らの作品を四分類した総集を残したが、本稿ではこの指標を利用して考察してみたい。

元和十年（八一五）十二月、四十四歳の白居易は、親友の元稹（元九）宛てに極めて長文の手紙を送った。これがいわゆる「与元九書（元九に与える書）」の名文であり、白居易の文学理念を理解するために重要な文献となっている。

この手紙の後半では、白居易は自らの詩歌の内容を諷諭、閑適、感傷、雑律詩の四つに分類した。

その後、長慶四年（八二四）十二月、四十六歳の元稹が、白居易の詩文二千一百九十一首を集めて、初めて五十巻の総集『白氏長慶集』を編纂した際にも、白居易の詩の四分類に従って分類している。すなわち前半二十巻の詩歌は、諷諭（第一〜四巻）、閑適（第五〜第八巻）、感傷（第九〜第十二巻）、雑律詩（第十三〜二十巻）の構成である。⁽¹⁾

この『白氏文集』の四分類を指標として、『枕草子』と『源氏物語』に引かれる『白氏文集』の詩句が、どの部分に属すのかを考えてみたい。まず、先学で指摘された『枕草子』と『源氏物語』における『白氏文集』の引用の箇所を

総覧とし、分析を試みる⁽²⁾。

結論から先に言えば、『枕草子』には感傷詩が多いと言える。また感傷詩に分類される長恨歌は、『枕草子』には一箇所だけ引用されるが、『源氏物語』では十二箇所で引用されている。この点からも、両作品の特質の差として、『白氏文集』における「感傷詩」の扱われ方が顕著に表れていることがわかる（この点は本稿の後半で考察したい）。

『白氏文集』に関する研究は、下定雅弘が「白居易の詩に関する研究は数多いが、感傷詩については、ほとんど論じられたことがない。」⁽³⁾と言われるように、まだまだ問題を残しているようである。そこで、本稿では「感傷詩」の引用のされ方を中心に、『枕草子』と『源氏物語』の性格を考察する。

二 『枕草子』と『源氏物語』における『白氏文集』総覧

総覧では、上の二段は『枕草子』における『白氏文集』の引用の箇所であり、下の二段は、『源氏物語』における『白氏文集』の引用の箇所である。『枕草子』と『源氏物語』本文は、新編日本古典文学全集による。『白氏文集』本文は、『白居易集箋校』（上海古籍出版社）により、訓読文は新釈漢文大系による。『枕草子』段数と『源氏物語』巻名及びページ数を記した。また白詩の巻数、タイトルと順番の数字を、「枕」と「源」⁽⁴⁾の下に示した。

『枕草子』

【一】春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。
 夏は夜。月のころはさらなり。闇もなほ、螢のおほく飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。
 秋は夕暮。夕日のさしに、鳥のねどころへ行くとして、三つ四つ、二つ

『白氏文集』

卷三十一 雑律
 ① 早春憶蘇州
 吳苑四時風景好
 就中偏好是春天
 霞光曙後殷於火
 水色晴來嫩似煙
 卷二十六 雜律
 ② 秋思
 夕照紅於燒
 晴空碧勝藍
 獸形雲不一
 弓勢月初三

『源氏物語』

【桐壺】（前略）ある時には、大殿籠りすぐしてやがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前さらずもてなさせたまひしほどに（一九頁）
 たづねゆくまぼろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく
 絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければいとにほひすくなし（三五頁）

『白氏文集』

卷十二 感傷
 ① 長恨歌
 春宵苦短日高起
 從此君王不早朝
 承歡侍宴無閒暇
 春從春遊夜專夜
 ② 長恨歌
 臨邛道士鴻都客
 能以精誠致魂魄
 為感君王展轉思
 遂教方士殷勤覓

三つなど飛びいそぐさへ
あはれなり。まいて雁かり
どのつらねたるが、いと
小さく見ゆるは、いとを
かし。日入いり果てて、風
の音ね、虫の音ねなど、はた
言ふべきにあらず。

冬はつとめて、雪の降
りたるは言ふべきにもあ
らず、霜のいと白きも、
またさらでもいと寒きに、
火などいそぎおこして、
炭持すみもてわたるも、いとつ
きづきし。昼になりて、
ぬるくゆるびもていけば、
火桶ひきの火も、白き灰ひびがち
になりてわろし(二六頁)

卷十感傷

枕 3 送兄弟迴雪夜

夜長火消盡
歲暮雨凝結
寂寞滿爐灰
飄零上階雪
對雪畫寒灰
殘燈明復滅
灰死如我心
雪白如我髮

太液芙蓉、未央柳も、げ
にかよひたりし容貌かたちを、
唐からめいたるよそひはうる
はしうこそありけめ(中略)

翼はねをならべ、枝をかはさ
むと契ちぎらせたまひしに、
かなはざりける命のほど
ぞ尽きせずうらめしき
(三五頁)
灯火ともしびを挑かげ尽くして起き
おはします。右近うこんの司つかさの
宿直とのあまうし奏の声聞こゆるは、
丑うしになり(中略)明くるも
知らでと思し出づるにも、
なほ朝あさまつりごと政は怠おそらせた
まひぬべかめり(三六頁)

源 3 長恨歌

歸來池苑皆依舊
太液芙蓉未央柳
芙蓉如面柳如眉
對此如何不淚垂

源 4 長恨歌

在天願作比翼鳥
在地願為連理枝
天長地久有時盡
此恨綿綿無絕期

源 5 長恨歌

孤燈挑盡未成眠
遲遲鐘鼓初長夜

源 6 長恨歌

春宵苦短日高起
從此君王不早朝

【三五】木の花は（中略）
心もとなうつきためれ。
楊貴妃の、帝の御使に
会ひて、泣きける顔に似
せて、「梨花一枝、春、雨
を帯びたり」など言ひた
るは、おぼろけならじと
思ふに、なほいみじうめ
でたき事は、たぐひあら
じとおぼえたり（八七頁）
桐の木の花、紫に咲きた
るは、なほをかしきに、
葉のひろごりざまぞうた
てこちたけれど（中略）ま
いて琴に作りて、さまざ
まなる音の出で来るなど
は、をかしなど（八八頁）

卷十二 感傷

枕 4 長恨歌

玉容寂寞淚闌干
梨花一枝春帶雨

卷十四 雜律

枕 5 江岸梨花

梨花有思緣和葉
一樹江頭惱殺君

最似嬌閨少年婦

白妝素袖碧紗裙

卷二 諷論

枕 6 答桐花

截為天子琴
刻作古人形

況此好顏色

花紫葉青青

【帶木】（前略）おのづか

ら軽き方にぞおぼえはべ
るかし。繫がぬ舟の泛き
たる例もげにあやなし

（六八頁）

親聞きつけて、酒杯もて

出でて、「わが兩つの途歌

ふを聴け」となむ聞こえ

ごちはべりしかど、をさ

をさうちとけて（八五頁）

【夕顔】白栲の衣うつ

砧の音も、かすかに、こ

なたかなた聞きわたされ、

空とぶ雁の声とり集めて

忍びがたきこと多かり。

端近き御座所なりければ、
遣戸を引き（一五六頁）

卷三十六 半格

源 7 偶吟

無情水任方圓器
不繫舟隨去住風

卷二 諷論

源 8 議婚

四座且勿飲
聽我歌兩途

卷十九 雜律

源 9 聞夜砧

誰家思婦秋擣帛
月苦風淒砧杵悲

卷三十三 雜律

源 10 酬夢得霜夜對月

月帶新霜色
砧和遠雁聲

【四七】職の御曹司しきのみさうしの

西面にしおもての立藪たてじもとみのもとにて

(中略)「わがもとの心の本性ほんじやう」とのみのたまひて、

「改まらざるものは心な

り」とのたまへば、「さて

『はばかりなし』とは、

何を言ふにか」とあやし

がれば、笑ひつつ(一〇六

頁)

【七七】御仏名みぶつみやうのまたの

日(中略)ひとわたり遊び

て、琵琶ひ弾きやみたるほ

どに、大納言殿、「琵琶、

声やんで、物語せむとす

る事おそし」と誦ずしたま

へりしに、隠れ臥したり

しも起き出でて(二三四頁)

卷六閑適

⑦ 詠拙

所稟有巧拙

不可改者性

卷十一感傷

⑧ 同韓侍郎遊鄭家池

齒髮雖已衰

性靈未云改

卷十二感傷

⑨ 琵琶引

忽聞水上琵琶聲

主人忘歸客不發

尋聲暗問彈者誰

琵琶聲停欲語遲

(中略)いとあはれに、朝あした

の露にことならぬ世を、

何をむさぼる身の祈りに

かと聞きたまふ(中略)

長生殿ちやうせいだんの古き例たぬしはゆゆ

しくて、翼はねをかはさむと

はひきかへて、弥勒みらくの世

をかねたまふ(中略)

夜半よなかも過ぎにけんかし、

風のやや荒々しう吹きた

るは。まして松の響こき木

深く聞こえて、気色けしきある

鳥のから声に鳴きたるも、

梟うくろふはこれにやとおぼゆ。

(中略)恋しくて、「正ただに長

き夜」とうち誦ずじて臥ふし

たまへり(一八九頁)

卷二諷諭

⑪ 不致仕

朝露貪名利

夕陽憂子孫

卷十二感傷

⑫ 長恨歌

七月七日長生殿

夜半無人私語時

卷一諷諭

⑬ 凶宅

鼻鳴松桂枝

狐藏蘭菊叢

蒼苔黃葉地

日暮多旋風

卷十九雜律

⑭ 聞夜砧

八月九日正長夜

【七八】頭中將のすずろなるそら言を聞きて、(中略)炭櫃に、消え炭のあるして、「草の庵を誰かたづねむ」と書きつけて取らせつれど、また返事も言はず(一三六頁)

【七九】返る年の二月二十余日(中略)宰相の君の、『瓦に松はありつるや』といらへたるに、いみじうめでて、『西の方、都門を去れる事いくばくの地ぞ』と口ずさみつること「など、かしがましきまで言ひしこそ、をかかりしか(二四五頁)

卷十七雜律

①枕 10 廬山草堂夜雨獨寄

牛二李七庾三十二

員外

蘭省花時錦帳下

廬山雨夜草庵中

卷四諷論

①枕 11 驪宮高

翠華不來歲月久

牆有衣兮瓦有松

吾君在位已五載

何不一幸乎其中

西去都門幾多地

吾君不遊有深意

【末摘花】(前略)琴をぞ

なつかしき語らひ人と思

へる」と聞こゆれば、「三

つの友にて、いま一くさ

やうたてあらむ」とて、

「我に聞かせ(二六六頁)

幼き者は形蔽れず」とう

ち誦じたまひても、鼻の

色に出でていと寒しと見

えつる御面影ふと思ひ出

でられて、ほほ笑まれた

まふ(二九七頁)

【紅葉賀】(前略)すこし

心づきなき。鄂州にあり

けむ昔の人もかくやをか

しかりけむと、耳とまり

て聞きたまふ(三四〇頁)

卷二十九格詩

①源 15 北窗三友

欣然得三友

三友者為誰

琴罷輒舉酒

酒罷輒吟詩

卷二諷論

①源 16 重賦

幼者形不蔽

老者體無溫

悲喘與寒氣

并入鼻中辛

卷十感傷

①源 17 夜聞歌者

江月秋澄澈

鄰船有歌者

【九〇】上の御局うへの御簾つぼね

の前にて（中略）「なかば
隠したりけむ、えかくは
あらざりけむかし。あは
れ（中略）笑はせたまひて、
「別れは知りたりや」と
なむ仰せらるるも、いと
をかし（一七八頁）

【九三】あさましきもの
さし櫛くすりてみがくほど
に、物につきさへて折り
たる心地こころ（一八二頁）

【九六】職しきにおはします
ころ（中略）「ただ秋の月
の心を見はべるなり」と
申せば、「さも言ひつべ
し」と仰せ（一九四頁）

卷十二感傷

⑬ 琵琶引

醉不成歡慘將別
別時茫茫江浸月
千呼萬喚始出來
猶抱琵琶半遮面

卷四諷諭

⑭ 井底引銀餅

石上磨玉簪
玉簪欲成中央折

卷十二感傷

⑮ 琵琶引

東舟西舫悄無言
唯見江心秋月白

【葵】（前略）「旧ふるき枕まくら故

き衾ふすま、誰たれと共にか」とあ
る所に（六五頁）

【賢木】（前略）十六にて
故宮こみやに参りたまひて、二
十にて後おくれた（中略）階はしの
底ちもとの薔薇きょうひけしきばかり咲
きて、春秋の花盛りより
もしめやかに（一四二頁）

【須磨】（前略）またさる
べき書ふみども、文集など入
りたる箱、さては琴きん一つ
ぞ持たせたまふ（中略）来こ
し方かたの山は霞かすみはるかに
て、まことに三千里の外ほか
の心地こころするに、權かゝの雲しづくも
たへがたし（一八七頁）

卷十二感傷 長恨歌

⑯ 鴛鴦瓦冷霜華重
翡翠衾寒誰與共

卷三諷諭 上陽白髮人

⑰ 玄宗末歲初選入
入時十六今六十

卷十七雜律 薔薇正開

⑱ 甕頭竹葉經春熟
階底薔薇入夏開

卷四十三記序 草堂記

⑳ 堂中木榻四

素屏二漆琴一張
儒道佛書各三兩

卷

卷十三雜律

㉑ 冬至宿楊梅館

十一月中長至夜

三千里外遠行人

【一〇二】二月つごもり
 ごろに（中略）すこし春あ
 る心地こそすれとあるは、
 （中略）空寒み花にまがへ
 て散る雪にと、わななく
 わななく書きて取らせて、
 いかにも思ふ（二一〇頁）

【一三七】殿などのおは
 しまさで後（中略）御前の
 草のいとしげきを、『な
 どか。かきはらはせてこ
 そ』と言ひつれば、『こ
 とさら露置かせて御覧ず
 とて』と（中略）台の前に
 植ゑられたりける牡丹な
 どの、をかしき事」など
 のたまふ（二六一頁）

卷十四雑律

枕 15 南秦雪

往歲曾為西邑吏

慣從駱口到南秦

三時雲冷多飛雪

二月山寒少有春

卷九感傷

枕 16 秋題牡丹叢

晚叢白露夕

衰葉涼風朝

紅豔久已歇

碧芳今亦銷

幽人坐相對

心事共蕭條

枕をそばだて四方の嵐

を聞きたまふに、波ただ

ここともとに（二九九頁）

雁の連ねて鳴く声櫓の音

にまがへるを、うちなが

めたまひて（二〇一頁）

「二千里外故人心」と誦

じたまへる、例の涙もと

どめられず（二〇二頁）

竹編める垣しわたして、

石の階、松の柱、おろそ

かなるものからめづらか

にをかし（二二三頁）

酔ひの悲しび涙灑く春の

盃の裏」ともろ声に誦

じたまふ。御供の人も涙

をながす（二一五頁）

卷十六雑律 重題

源 23 遺愛寺鐘欵枕聽
香爐峰雪撥簾看

卷二十四雑律 河亭晴望

源 24 晴虹橋影出
秋雁櫓聲來

卷十四雑律 八月十五日

源 25 三五夜中新月色
二千里外故人心

卷十六雑律 香爐峰下

源 26 五架三間新草堂
石階桂柱竹編牆

卷十七雑律 十年三月

源 27 醉悲灑淚春杯裏
吟苦支頤曉燭前

【一五五】故殿このとのの御服おんかくのころ（中略）宰相さいしやう中将ちゆうじやう齊ただ信のぶ、宣方のぶかたの中將ちゆうじやう、道方みちかたの少納言せうなごんなどまゐりたまへるに、人々出でて物など言ふに、ついでもなく「明日あすはいかなる事をか」と言ふに、いささか思ひまはし、とどこほりもなく、「人間の四月をこそは」といらへたまへるが、いみじうをかしきこそ。過ぎにたる事なれども、心得て言ふは、誰もをかしき中に、女などこそさやうの物忘れはせね、男をいはさしも（二八五頁）

卷十六雑律

〔材〕 17 大林寺桃花

人間四月芳菲盡
山寺桃花始盛開
長恨春歸無覓處
不知轉入此中來

【明石】（前略）商人あきびとの中間ちゆうかんにてだにこそ、古ふると聞ききはやす人は（二四三頁）【総合】（前略）昔の御髪かみざしの端はしをいささか折かりて（三八四頁）【朝顔】（前略）「鎖じやうのいといたく錆さびびにければ開あかず」と愁うれふ（四八一頁）【少女】（前略）風の音の竹に待ちとられてうちそよめくに、雁かりの鳴きわたる声のほのかに（四八頁）【玉鬢】（前略）「胡この地の妻せ兒じをば虚むなしく棄すてつ」と誦すずるを、兵部の君聞きて（二〇一頁）

卷十二感傷 琵琶引

〔源〕 28 年長色衰 委身為賈人婦

卷十二感傷 長恨歌

〔源〕 29 釵留一股合一扇 釵擘黃金合分鈿

卷二十三雑律 贈皇甫

〔源〕 30 騎少馬蹄生易蹶 用稀印鎖澀難開

卷十九雑律 七言十二句

〔源〕 31 風生竹夜窗間臥 月照松時臺上行

卷三諷諭 縛戎人

〔源〕 32 胡地妻兒虛棄捐 沒蕃被囚思漢土

【一七五】村上むらかみの先帝せんたいの御時に（中略）月のいと明かきに「これに歌よめ。いかと言ふべき」と、兵衛ひやうゑの藏人くらうじんに給はせたりければ、「雪月花ゆきづきの時」と奏したりけるをこそ、いみじうめでさせたまひけれ（三〇五頁）

【二三七】雲は白き。紫。黒きもをかし。風吹くをりの雨雲あまぐも。明けはなるるほどの黒き雲の、やうやう消えて、しろうなり行くも、いとをかし。「朝あしたにさる色」とかや、文ふみにも作りたなる（三七二頁）

卷二十五雜律

①枕 18 寄股協律

琴詩酒伴皆拋我
雪月花時最憶君

卷十二感傷

①枕 19 花非花

花非花 霧非霧
夜半來 天明去
來如春夢幾多時
去似朝雲無覓處(5)

【胡蝶】（前略）廊らうを繞めぐれる藤の色もこまやかにひ

らけゆきにけり（中略）

龜うへの上の山もたづねじ舟のうちに老いせぬ名をば

ここに残さむ（一六七頁）

【常夏】（前略）窓の内なるほどは、ほどに従ひて、

ゆかしく思ふべかめるわざなれば（二二七頁）

【行幸】（前略）齡よはひなどこれよりまさる人、腰た

へぬまで屈かがまり歩ありく例ためし、昔も今も（二九七頁）

【梅枝】（前略）見たまふ人の涙さへ水茎みづくきに流れそふ心地して（四二〇頁）

卷二諷諭 傷宅

①源 33 繞廊柴藤架 夾砌紅藥欄

卷三諷諭 海漫漫

①源 34 童男非女舟中老 徐福文成多誕証

卷十二感傷 長恨歌

①源 35 楊家有女初長成 養在深閨人未識

卷二諷諭 不致仕

①源 36 金章腰不勝 偃僕入君門

卷六十八碑誌 故元少尹
①源 37 唯將老年淚 一灑故人文

【二六〇】関白殿、二月

二十一日に、法興院ほこういんの

積善寺さくぜんじ（中略）さて八、九

日のほどにまかづるを、

「いますこし近うなりて

を」など仰せらるれど、

出でぬ。いみじう常つねより

ものどかに照りたる昼ひるつ

方、「花の心ひらげざる

や。いかに、いかに」と

のたまはせられたれば、「秋

はいまだしく侍れど、夜よ

に九度ここのたびのぼる心地なむ

しはべる」と聞えさせつ

（四〇二頁）

卷十二感傷

〔材〕 20 長相思

思君秋夜長

一夜魂九升

二月東風來

草拆花心開

思君春日遲

一日腸九迴

【藤裏葉】（前略）わが宿

の藤の色こきたそかれに

尋ねやはこぬ春のなごり

を（四三四頁）

【若紫上】（前略）「猶なほ残

れる雪」と忍びやかに口

ずさびたまひ（六九頁）

【若紫下】（前略）二月の

中の十日ばかりの青柳あをやなぎの、

わづかに（一九一頁）

【柏木】（前略）「静かに

思ひて嗟なげくに堪へたり」

とうち誦ずうじたまふ。五十

八を十ととり（三三三頁）

【横笛】（前略）むつかし

う思うたまへ沈める耳を

だに明あきらめ（三五四頁）

卷十三雜律 三月三十日

〔源〕 38 惆悵春歸留不得

紫藤花下漸黄昏

卷十六雜律 庾樓曉望

〔源〕 39 子城陰處猶殘雪

衙鼓聲前未有塵

卷三十一雜律 楊柳枝詞

〔源〕 40 依依裏裏復青青

句引春風無限情

卷二十八雜律 與微之

〔源〕 41 五十八翁方有後

靜思堪喜亦堪嗟

卷十二感傷 琵琶引

〔源〕 42 今夜聞君琵琶語

如聽仙樂耳暫明

【二七四】成信なりのぶの中將は、入道兵部卿宮ひやうぶきさうのみやの御子にて（中略）月の明かき見るばかり、ものの遠く思ひやられて、過ぎにし事の、憂うれかりしも、うれしかりしも、をかしとおぼえしも、ただ今のやうにおぼゆるをりやはある。こまの物語は、何ばかりをかしき事もなく、こまも古めき、見所おほからぬも、月に昔を思ひ出でて、虫かはほりばみたる蝙蝠取り出でて、「もと見しこまに」と言ひてたづねたるが（四二七頁）

卷十四雜律

〔枕〕 21 贈内

莫對月明思往事
損君顔色減君年

〔枕〕 22 八月十五日

三五夜中新月色
二千里外故人心

【夕霧】（前略）夕ゆふの露

かかるほどのむさぼりよ。いかでこの髪せ刺り（中略）

岩木よりけになびきがたきは、契り遠うて、憎しなど思ふやう（四七九頁）

【幻】（前略）「窓をうつ

声」など、めづらしからぬ古言ふることをうち誦ずじたまへるも（五三九頁）

「夕せきでん殿に螢飛んで」と、例の、古言ふることもかかる筋にのみ口くち馴れたまへり。

（中略）大空をかよふまほろし夢にだに見えこぬ魂たまの行くゆくたづねよ

何ごとにつけ（五四五頁）

卷二諷諭 不致仕

〔源〕 43 朝露貪名利
夕陽憂子孫

卷四諷諭 李夫人

〔源〕 44 人非木石皆有情
不如不遇傾城色

卷三諷諭 上陽白髮人

〔源〕 45 耿耿殘燈背壁影
蕭蕭暗雨打窗聲

卷十二感傷 長恨歌

〔源〕 46 夕殿螢飛思悄然
孤燈挑盡未成眠

卷十二感傷 長恨歌

〔源〕 47 臨邛道士鴻都客
能以精誠致魂魄

【二八〇】雪のいと高う
降りたるを、例ならず
御格子まゐりて、炭櫃に
火おこして、物語などし
てあつまりさぶらふに、
少納言よ。香炉峰の雪い
かならむ」と仰せらるれ
ば、御格子上げさせて、
御簾を高く上げたれば、
笑はせたまふ。人々も「さ
る事は知り、歌などにさ
へうたへど、思ひこそよ
らざうつれ、なほこの宮
の人にはさべきなめり」
と言ふ（四三四頁）

卷十六雑律

〔材〕 23 重題

遺愛寺鐘欝枕聽
香爐峰雪撥簾看

【紅梅】（前略）この東
のつまに、軒近き紅梅の
いとおもしろく（四七頁）
【竹河】（前略）皆人无徳
にものしたまふめる末に
参りて（六一頁）
今宵は、なほ鶯にも誘は
れたまへ」とのたまひ出
だしたれば（七一頁）
この桜の老木になりにけ
るにつけても、過ぎにけ
る齡を思ひ（七七頁）
【総角】（前略）外国に
ありけむ香の煙（三二二
頁）
【宿木】いとつれづれな
るを、いたづらに日を送
る戯れにて（中略）

卷十六雑律 北亭招客

〔源〕 48 春風北戸千莖竹
晚日東園一樹花

卷三諷論 上陽白髮人

〔源〕 49 未容君王得見面
已被楊妃遙側目

卷十八雑律 春江

〔源〕 50 鶯聲誘引來花下
草色句留坐水邊

卷二十九格詩 六十六

〔源〕 51 童稚盡成人
園林半喬木

卷四諷論 李夫人

〔源〕 52 反魂香降夫人魂

卷十六雑律 官舎閒題

〔源〕 53 送春唯有酒

銷日不過棋

【二二三】三条の宮におはしますころ、(中略)薬玉まみらせなどす。若き人々、御匣殿みくしげどのなど薬玉して、姫宮ひめみや、若宮につけたてまつらせたまふ。いとをかしき薬玉ども、ほかよりまみらせたるに、青ざしといふ物を、持て来たるを、青き薄様うすやうを、艶えんなる硯すずりの蓋ふたに(中略)みな人の花や蝶てふやといそぐ日もわが心をば君ぞ知りける この紙の端はしを引き破やらせたまひて書かせたまへる、いとめでたし(四三三頁)

卷十一 感傷

〔枕〕 24 步東坡

新葉鳥下6來
菱花蝶飛去

「まづ、今日は、この花一枝ひとしだゆるす」とのたまはすれば(三七八頁)
【蜻蛉】(前略)「人木石にあらざればみな情なまけあり」と(二五二頁)
絵かに描かきて恋しき人見る人はなくやは(中略)
「中に就ついて腸断はらわたたゆるは秋の天」といふことを、いと忍しのびやか(二六九頁)
【手習】狐へんくの人に變化へんくするとは昔より聞けど、まだ見ぬものなり(中略)
葉の薄うすきが如ごとし」と言いひ知らせて、「松門しょうもんに暁あけりて月徘徊ははいす」(三四九頁)

卷二十八 雜律 晚桃花

〔源〕 54 春深欲落誰憐惜 白侍郎來折一枝

卷四 諷論 李夫人

〔源〕 55 人非木石皆有情

〔源〕 56 丹青畫出竟何益 不言不笑愁殺人

卷十四 雜律 暮立

〔源〕 57 大抵四時心總苦 就中腸斷是秋天

卷四 諷論 古冢狐

〔源〕 58 古冢狐 妖且老 化為婦人顏色好

卷四 諷論 陵園妾

〔源〕 59 未死此身不令出 松門到曉月裴回

総覧のように、『枕草子』における『白氏文集』の引用は二十四箇所（枕1〜枕24）であり、『源氏物語』における『白氏文集』の引用は五十九箇所（源1〜源59）である。分量から見ると、『枕草子』より『源氏物語』の方が圧倒的に多い。今度は『白氏文集』の四分類に従った観点から、『枕草子』と『源氏物語』における『白氏文集』の引用の差を見た。具体的に『白氏文集』の四分類は、次のA諷諭、B閑適、C感傷、D雑律（A B C Dの分類は、主に上海古籍出版社『白居易集箋校』による）に分けて、『枕草子』と『源氏物語』における『白氏文集』を対照させ以下に纏めてみた。

『白氏文集』

『枕草子』

『源氏物語』

A 諷諭

卷一諷諭	凶宅……………	なし	源	13
卷一諷諭	傷宅……………	なし	源	33
卷二諷諭	議婚……………	なし	源	8
卷二諷諭	重賦……………	なし	源	16
卷二諷諭	不致仕……………	なし	源	11
卷二諷諭	答桐花……………	枕6	源	36
卷三諷諭	海漫漫……………	なし	源	34
卷三諷諭	縛戎人……………	なし	源	32
卷三諷諭	上陽白髮人……………	なし	源	19
			源	49
			源	45

D 雜律

卷十三雜律	三月三十日	なし	源	38
卷十三雜律	冬至宿楊梅館	なし	源	22
卷十四雜律	八月十五日	枕 22	源	25
卷十四雜律	南秦雪	枕 15	なし	
卷十四雜律	江岸梨花	枕 5	なし	
卷十四雜律	暮立	なし	源	57
卷十四雜律	贈内	枕 21	なし	
卷十六雜律	庾樓曉望	なし	源	39
卷十六雜律	官舎間題	なし	源	53
卷十六雜律	北亭招客	なし	源	48
卷十六雜律	大林寺桃花	枕 17	なし	
卷十六雜律	香爐峰下新	なし	源	26
卷十六雜律	重題	枕 23	源	23
卷十七雜律	薔薇正開	なし	源	20
卷十七雜律	廬山草堂夜雨	枕 10	なし	
卷十七雜律	十年三月	なし	源	27
卷十八雜律	春江	なし	源	50

『枕草子』と『源氏物語』における『白氏文集』（張）

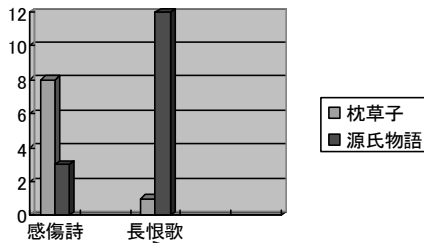
卷十九雜律	七言十二句	なし	源	31
卷十九雜律	聞夜砧	なし	源	9
卷二十三雜律	贈皇甫	なし	源	30
卷二十四雜律	河亭晴望	なし	源	24
卷二十五雜律	寄殷協律	枕 18	なし	
卷二十六雜律	秋思	枕 2	なし	
卷二十八雜律	與微之	なし	源	41
卷二十八雜律	晚桃花	なし	源	54
卷二十九格詩	北窗三友	なし	源	15
卷二十九格詩	六十六	なし	源	52
卷三十一雜律	早春憶蘇州	枕 1	なし	
卷三十一雜律	楊柳枝詞	なし	源	40
卷三十三雜律	霜夜對月	なし	源	10
卷三十六半格	偶吟	なし	源	7
卷四十三記序	草堂記	なし	源	21
卷六十八碑誌	故元少尹	なし	源	37

右の『白氏文集』四分類に従って、それぞれ『枕草子』と『源氏物語』の引用に当たる数を、さらに次のような図表でまとめてみたい。

図一 白詩四分類から見た枕草子と源氏物語

合計	重複	D 雑律	C 感傷	B 閑適	A 諷諭	白氏文集
24	2	10	8	1	3	枕草子
59	20	25	3	0	11	源氏物語

図一「白詩四分類から見た枕草子と源氏物語」に示したように、引用の分量は、『枕草子』より『源氏物語』の方が、倍くらい多い。また『源氏物語』では、引かれたA諷諭とD雑律詩が、『枕草子』より多かったが、『枕草子』では、引かれたB閑適とC感傷詩が、『源氏物語』より多かったのである。さらに感傷詩に分類した長恨歌は、『源氏物語』の中で繰り返し引用されていることが特徴と言えよう。例えば、図一の「重複」では、『枕草子』は二回であるが、『源



図二 感傷詩と長恨歌から見た枕草子と源氏物語のイメージ

感傷詩から見た『枕草子』と『源氏物語』の差

長恨歌から見た『枕草子』と『源氏物語』の差

氏物語』では二十回である。その二十回のうち、十二回は長恨歌の反復の引用である。

さて、図二のように、二点を論じたい。一つは、感傷詩の引用、もう一つは、長恨歌の引用である。先行の研究を踏まえ、感傷詩と長恨歌を中心に、『枕草子』と『源氏物語』の性格を考えてみたい。

三 「長恨歌」の引用から見た『枕草子』と『源氏物語』

前節に掲げた図表の通り、長恨歌の引用については、清少納言が一回だけで、紫式部は十二回繰り返して引用している。それぞれその引用の箇所を検討することで、その特徴を確認してみよう。

まず、『枕草子』で唯一「長恨歌」が引かれる「木の花は」の章段の場面を確認する。（本文は新編日本古典文学全集による、以下同）。

〔総覧④〕

【三五】木の花は（中略）梨の花、世にすさまじきものにして、近うもてなまず、はかなき文つけなどだにせず。愛敬あいそたうおくれたる人の顔などを見ては、たとひに言ふも、げに葉の色よりはじめてあはひなく見ゆるを、唐土たうどには限りなき物にて、文にも作る、なほさりともしやうあらむと、せめて見れば、花びらの端はしにをかしきにほひこそ、心もとなうつきためれ。楊貴妃やうききひの、帝みかぜの御使つかひに会ひて、泣きける顔に似せて、「梨花一枝、春、雨あめを帯おびひたり」など言ひたるは、おぼろけならじと思ふに、なほいみじうめでたき事は、たぐひあらじとおぼえたり。

（八七頁）

木の花に華がる梨の花は、人にあまり愛されなかったものと清少納言は見る。そして、それは、傍線のように、長

恨歌の梨の花が思い出され、楊貴妃の顔に似るといふ文を連想させる文としている。(なほ、『白氏文集』本文の訓読みは新釈漢文大系により、該当するページ数を示した、以下同)。

〔総覧④〕

玉容寂寞淚闌干

ぎよくようせきぱく 玉容寂寞として

なみだらんかん 淚闌干たり、

梨花一枝春帶雨

りくわいつし 梨花一枝

はるあめ 春雨を帶おぶ。

玉のような顔は寂しげで、その頬を涙がとめどなく流れ落ちるさまは、一枝の梨の花に、春の雨が細やかに降りかかっているような風情である。

(八一五〜八二〇頁)

道士によると、海の蓬萊山の中に仙界があつて、そこで楊貴妃と会つた際、悲しく泣いた楊貴妃の顔は、春の雨にぬれているようだといふ。清少納言の梨の花に対する心情は、長恨歌における梨の花のイメージと重なる。

一方、紫式部は、長恨歌を十二回繰り返し引いた。桐壺巻には六回見えるが、注目されるのは、六回の引用のうち、「春宵苦短日高起 從此君王不早朝」が二回繰り返されて引かれていることである。その詩は以下の通り。『源氏物語』本文は新編日本古典文学全集により、ページ数を示した。(以下同)。

I 〔総覧源Ⅰ〕

【桐壺】(前略)

ある時には、大殿籠りおほどのこもすぐしてやがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前おまへさらへずもてなさせ

たまひしほごに、(一九頁)

II 〔総覧源Ⅵ〕

【桐壺】(前略)

明るくも知らずと思し出づるにも、なほ朝政あさまつりは怠おろそかせたまひぬべかめり。(二六頁)

右ⅠとⅡ、それぞれ長恨歌の次の詩に一致する。

〔総覧源Ⅰと源6〕

Ⅰ 春宵苦短日高起 しゅんせうみじか 春宵短きに苦しみ日高くして起き、

Ⅱ 從此君王不早朝 これより くんわう はやく ちゆう 此より 君王 早く朝せず。

春の宵はあまりにも短く感じられ、日が高くなってからようやく床から起き出すような有り様となり、この頃から君王は早朝からの政務を怠るようになった。

（八一〇～八一八頁）

右の「春宵苦短日高起」は、Ⅰの傍線部、帝が朝おそくまでお休みになる様子と、「從此君王不早朝」は、Ⅱの帝が朝の政務を怠っている様子とそれぞれ合致する。政務を怠ることをとがめる詩句を繰り返して引いた紫式部の表現は、清少納言のものとは明らかに異なる。清少納言は長恨歌を感傷的なイメージで連想しているが、紫式部は必ずしもそうではない。繰り返し引かれた「日高起」と「不早朝」の表現は、感傷詩のイメージではなく、諷論的色合が強い。

紫式部が『白氏文集』の諷論詩に注目したことは、『紫式部日記』の中で確認することができる。例えば、次のような記事がある。（本文は新編日本古典文学全集による）「宮の、御前にて、文集のところどころ読ませたまひなどして、さるさまのこと知ろしめさまほしげにおぼいたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬもののひまひまに、をととしの夏ごろより、楽府といふ書一卷をぞ、しどけながら教へたてきこえさせてはべる」（二〇九～二一〇頁）。傍線部の楽府、二巻は、『白氏文集』の四分類では、第四巻と第五巻に当たる諷論詩である。

また紫式部の長恨歌を諷論的にみることは、陳鴻の「長恨歌伝」の観点に似る。長恨歌の前ある「長恨歌伝」後半には、次のようにある。（本文は新釈漢文大系による）

楽天因為長恨歌。

楽天因りて長恨歌を為る。

意者不但感其事、

意者但だ其の事に感ずるのみならず

亦欲懲尤物、窒亂階、

亦た尤物を懲らし、亂階を窒ぎ、

垂於将来也。

将来に垂れんと欲するならん。

右の通り、白居易の「長恨歌」は単なる感傷的な性質だけでなく、諷論的な性質とも解釈している。長恨歌の冒頭文「漢皇重色思傾国」と、最後の句「此恨綿綿無絶期」を合せて読むと、確かに感傷より諷論的な意味と取れるだろう。この方法で、長恨歌を繰り返して引用したのではないだろうか。

また、『源氏物語』では「長恨歌」以外の感傷詩は『枕草子』より少ない事実から見ると、やはり紫式部は清少納言と違って、「感傷詩」より「諷論詩」に注目したのではないだろうか。

では、なぜ『源氏物語』より『枕草子』には感傷詩が多かったのか。この点について、次の節に分析してゆく。

四 「感傷詩」引用から見た『枕草子』背後の悲傷

感傷詩の引用は、『源氏物語』より『枕草子』の方が多し。これは両作品の『白氏文集』の引用から見た性格の差と言えよう。『枕草子』に感傷詩が多かった理由は、次の二点と考えられる。一つは、清少納言が意識的に、父藤原道隆を失った定子の周りの悲況を表すために、感傷詩の表現を借りて表した事。もう一つは、定子本人が自らの状況と表現するために感傷詩を借りて詠歌したのである。

まず一つ目の父藤原道隆が亡くなった後の定子の周りの状況に関わる章段を取り扱ってみたい。それは次の「殿な

どのおはしまさで後、世の中に事出で来」の章段である。

殿とのなどのおはしまさで後、世の中に事出いで来、さわがしうなりて、宮もまゐらせたまはず、小二条殿といふ所におはしますに、何なにともなくうたてありしかば、久しう里にゐたり。御前おまへわたりのおぼつかなきにこそ、なほえ絶えてあるまじかりける。

右中将おはして物語したまふ。「今日けふ、宮にまゐりたりつれば、いみじう物こそあはれなりつれ。女房の装束さうそく、裳も、唐衣からぎをりにあひ、たゆまで候まをらふかな。御簾みすのそばのあきたりつるより見入れつれば、八、九人ばかり朽葉くちはの唐衣うすぎ、薄色うすいろの裳もに、紫苑しそん、萩はぎなどをかしうてゐ並なみたりつるかな。

御前の草のいとしげきを、『などか。かきはらはせてこそ』と言ひつれば、『ことさら露置つゆおきかせて御覽ごらんずとて』と、宰相さいしやうの君の声にていらへつるが、をかしうもおぼえつるかな。『御里居さとみ、いと心憂こころうし。かかる所に住ませたまはむほどは、いみじき事ありとも、かならず候ふべきものにおぼしめされたるに、かひなく』とあまた言ひつる。語り聞かせたてまつれとなめりかし。まゐりて見たまへ。あはれなりつる所のさまかな。台の前に植うゑられたりける牡丹ぼたんなどの、をかしき事」などのたまふ。「いさ。人のにくしと思ひたりしが、またにくくおぼえはべりしかば」といらへきこゆ。

（二五九〜二六一頁）

藤原道隆が、長徳元年（九九五）四月十日に亡くなった翌年、四月二十四日、内大臣伊周が太宰府に左遷された。定子は小二条殿に遷御し、清少納言も宮中から退出し、里居した。右の章段は、長徳二年（九九六）夏から秋にかけての頃のことであるが、枯草や萎えた牡丹などの描写からは、秋のことと考えることが相応しいだろう。特に牡丹の表現に関する典故を、池田龜鑑は『白氏文集』卷十一感傷詩の「秋題牡丹叢」と指摘した。その詩は次の通り。

「総覧(枕) 16」

秋題牡丹叢

秋 牡丹の叢に題す

晚叢白露夕 衰葉涼風朝

晚叢 白露の夕べ、衰葉 涼風の朝。

紅艷久已歇 碧芳今亦銷

紅艷 久しく已に歇き、碧芳 今亦た銷す。

憂人坐相對 心事共蕭條

憂人 坐して相對し、心事 共に蕭條たり。

枯れかかった牡丹の群がりに白露の降りる夕べ、衰えた葉に秋風が吹きぬける朝。紅に燃えた花の艷麗さはとつくの昔に尽きてしまい、緑葉の放っていた芳香も今また消え失せようとしている。憂愁に沈む人は、じっと座り込んだままこの枯れ衰えた牡丹に向かい合い、その心中の思いは、牡丹も人も共にうらぶれてわびしげだ。

(四八〇頁)

詩の内容と『枕草子』の場面を照合してみると、枯れた牡丹に関わる風景について、『枕草子』の場面と詩のイメージは一致する。傍線部「露置かせて」、「いと心憂し」、「牡丹」と「牡丹叢」、「憂人坐相對」のイメージは重なる。「牡丹」は、いずれも『源氏物語』と『紫式部日記』の中には見えない表現である。清少納言は紫式部よりも感傷詩に注目していたと言える。

また、中宮定子本人が感傷詩を引いていたことも注目される。「三条の宮におはしますころ」の段を取り上げてみたい。

三条の宮におはしますころ、五日の菖蒲の興など持てまゐり、薬玉まゐらせなどす。若き人々、御匣殿など薬玉して、姫宮、若宮につけたてまつらせたまふ。いとをかしき薬玉ども、ほかよりまゐらせたるに、青ざしといふ物を、持て来たるを、青き薄様を、艶なる硯の蓋に敷きて、「これ籬越しに候ふ」とてまゐらせされば、

みな人の花や蝶てぶやといそぐ日もわが心をば君ぞ知りける

この紙の端はしを引き破やらせたまひて書かせたまへる、いとめでたし。

（三五八頁）

これは、『枕草子』では年次の確定できる数少ない章段で、長保二年（一〇〇〇）五月五日の端午節のことになる。しかし、この日は、一条天皇が新たな中宮彰子の所に居て、若い女房も大勢いた風景は、『采花物語』「かがやく藤壺」巻にある通りである。一方、皇后定子の元には、清少納言しかいなかった。五月五日端午節の日、清少納言が「青ざし」という物を定子に献上したとき、定子が感心して、次の和歌を詠んだ。

みな人の花や蝶やといそぐ日もわが心をば君ぞ知りける

「花や蝶や」は、次のような『白氏文集』感傷詩の詩句からの発想といえる。

「総覧⑳ 24」

歩東坡 東坡とうばを歩あるく

新葉鳥下しんえふ來 新葉しんえふ鳥とり下くだり來きたり

萎花蝶飛去みくわ 萎花みくわ蝶てぶ飛とび去さる

新しく芽吹いた若葉には空から鳥たちが舞い降りてくる一方、しぼんだ花からは蝶たちが飛び去っていく。

（六九三〜六九四頁）

定子は自らを枯れた花に喩え、周りの若い女房が蝶のように飛んでいった事を比喻したのでろう。『白氏文集』の感傷詩を踏まえた和歌だからこそ、清少納言は「いとめでたし」と賛美したのである。（拙稿『枕草子』における漢語の表現——「三条の宮におはしますころ」の章段を中心に——『総研大文化科学研究』第八号、二〇一二年を参考）

このように、定子が自ら白詩の感傷詩を踏まえた歌を詠み、清少納言も感傷詩の表現を借りて父を失った定子の周りの事情を表したことから、『源氏物語』より『枕草子』の方に感傷詩が多くなったといえよう。

五 おわりに

以上、『枕草子』と『源氏物語』における『白氏文集』について考察した。『枕草子』に感傷詩が多かった理由は次の二点と考える。一つは、中宮定子が自ら感傷詩を引用して詠歌を行ったこと。もう一つは、清少納言が、父藤原道隆を失ったからの定子の周囲の悲況を表すために、意識的に感傷詩を踏まえたということである。また『源氏物語』では、紫式部が「長恨歌」を繰り返して引用することは、感傷的な部分ではなく、諷諭詩として多く引用したことがわかった。

清少納言と紫式部は感傷詩の引き方が違う。これは、『枕草子』と『源氏物語』を鑑賞するためには、重要な視点と言えよう。従来では、『枕草子』は「をかし」文学と言われているが、『源氏物語』より多くの『白氏文集』の感傷詩が存在していることから見ると、もっと深く作者の意図を理解するために、『枕草子』における感傷詩を研究することが必要であろう。

〔注〕

(1) 藤原克己「白居易自身が数次の段階を経て編んだもので、もと「前集」五十巻・「後集」二十巻・「続後集」五巻の計七十五巻から成っていた（ただし「続後集」五巻は早くに散逸し、現存の『白氏文集』はその拾遺詩篇

一卷を付した七十一巻本である。」「源氏物語における〈愛〉と白氏文集」、「日向一雅編『源氏物語と漢詩の世界』——『白氏文集』を中心に——（青簡社 二〇〇九）九頁。

(2) この点については、かつて古沢未知男は『漢詩文より見た源氏物語の研究』（桜楓社 一九六八）の第三章の第三節「文集引用より見た源語と枕」では、同様な視点が見えるが、『枕草子』と『源氏物語』及び『白氏文集』の本文を対照する考察はなかった。また本稿の考察の結果と相違がある。例えば、「閑適詩」の場合、『枕草子』には見えるが、古沢未知男の指摘には「○」であった。また『枕草子』における『白氏文集』総合数は、前掲した総覧のように、二十四箇所が見えるが、古沢未知男の指摘には十五箇所であった。

(3) 下定雅弘『白氏文集を読む』（勉誠社 一九九六）一六四頁。

(4) 参考した文献は、主に次のような論考である。①『枕草子大事典』（勉誠出版）「枕草子と漢籍」（矢作武）、②新編日本古典文学全集『源氏物語』（小学館）「漢籍・史書・仏典引用一覧」（今井源衛）、③稿者の論考である。

(5) 萩谷朴の指摘に関して疑問点について、張培華「枕草子「雲は」章段中の「朝にさる色」『古代中世文学論考』第十八集（新典社 二〇〇六）を参照。

(6) 張培華「『枕草子』における漢語の表現——「三条の宮におはしますころ」の章段を中心に——」『総研大文化科学研究』第八号、二〇一二年を参照。